14　要約のコツ［表現］

　文章は、すべて自分の言葉で書くとは限りません。例えば、レポートの中で、図書館で見つけた本の内容をまとめて報告することがあります。その場合は、他人の文章を読んで整理してまとめる必要があります。つまり、他人の文章を要約します。

　要約も、文章の書き方の一つで、大事なことです。そこで、要約の基本的な方法を身につけておくようにしましょう。

要約の基本

　要約をするには、その文章において、どの部分が重要でどの部分が重要でないかを見分ける必要がある。例えば、次の文章で考えてみよう。

　「若者たち」「私ども」などの「たち」も「ども」も、人間を表す語について複数であることを示す。「たち」と「ども」を比べると、「あなたたち」とは言えるが、「あなたども」とは言えない。また、「私たち」と「私ども」では、「私ども」のほうがへりくだった言い方である。こうしたことから、「たち」のほうが、敬意が高いと考えられる。

　右の赤字部分は、内容の中心となる重要な部分である。それに対して、黒字部分は、例を挙げていたり、説明を加えていたりしている、付加的な部分である。

　そこで、この重要な赤字部分を残す。この考え方が、要約の基本である。

　「たち」も「ども」も、人間を表す語について複数であることを示す。「たち」と「ども」を比べると、「たち」のほうが、敬意が高いと考えられる。

文章量の調整

　要約では、文字数の制限が厳しい場合もある。そこで、右の要約をさらに短い文章量にする場合、繰り返されている言葉に注目するとよい。

　右の要約は二つの文でできていて、「たち」と「ども」という言葉が重複している。これを一つにすることを考える。第一文の内容を第二文に入れてみると、次のようになる。

　人間を表す語について複数であることを示す「たち」と「ども」を比べると、「たち」のほうが、敬意が高いと考えられる。

レッスン１　次の各文の傍線部のうち、内容の上で重要な部分を示すものを選んで、解答欄に記号で書きなさい。

⑴　ア花と言えば桜を思い浮かべる人は多い。しかし、イ花と言えば桜を指すというのは平安時代後半以降で、奈良時代には主に梅を指していた。その証拠にウ『万葉集』では、桜を詠んだ歌が四十首余りなのに対して、梅を詠んだ歌は百首以上ある。

⑵　ア「あげく」という語は連歌と関係がある。イ連歌の最初の句を発句と言い、最後の句を挙げ句と言う。ウ連歌の最後の句の意味から終わりの意味になった。それを強調した形が「あげくの果て」である。エ「金回りの悪い日々が続き、あげくの果てに倒産した」や「けんかがひどくなり、あげくの果ては乱闘になった」と使われる。オ「あげくの果て」は、普通、悪いことに使われ、よいことには使われない。だから、カ「熱心に勉強して、あげくの果てに成功者になった」や「恋人たちはあげくの果てに結婚した」とは決して言わない。

⑴［　　　］　　⑵［　　　］［　　　］［　　　］

レッスン２　次の文章の要約として最も適当なものを、後のア～ウから選んで記号を○で囲みなさい。

近年、本をインターネットのサイトで買う人が増えている。わざわざ出かける必要もなく、せっかく行ったのに求める本がなかったというムダもない。とても便利である。

しかし、本のネット購入では絶対できないことがある。店内に並んでいる本の題名を眺めて歩くことである。これは一見何の意味もないようだが、実は大きな効用がある。

ア　近年、増えている、本をインターネットで買う方法はとても便利だという。しかし、ネット購入ではできないことだが、本の題名を眺めて歩くことは大きな効用がある。

イ　近年、本をインターネットのサイトで買うという人が増えている。とても便利だという。しかし、店内に並んでいる本の題名を眺めて歩くことは大きな効用がある。

ウ　本をインターネットで買うのは、わざわざ出かける必要もなく、せっかく行ったのに求める本がなかったというムダもないが、本の題名を眺めて歩くことができない。

レッスン３　次の文章はレッスン２の文章の続きです。今度は自分で要約文を後の解答欄に書きなさい。

　書店の新刊書のコーナーには、人々の興味をひきそうな出版物が並んでいる。それらの題名を眺めていると、世間の関心や世の中で何が問題になっているかの社会的な動向を知ることもできる。また、題名にひかれてたまたま手に取った本によって未知の世界に導かれることもある。街の書店は、本が並んでいることによって、利用者に思いがけない刺激や偶然の出会いを与えてくれるのである。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  |  |  |  |  |

【解答】

レッスン１

　⑴イ　⑵ア・ウ・オ

レッスン２

　ア

レッスン３

　書店で、興味をひきそうな出版物の題名を眺めていると、世間の関心や社会的な動向を知ることもできるし、題名にひかれて、未知の世界に導かれることもある。街の書店は、本が並んでいることによって、利用者に刺激や偶然の出会いを与えてくれるのである。